

ジンメルの女性論の研究（三）

石 塚 勝 雄

七

『女^{（註一）}における性は、正にあまりにも女の内在的性質でありすぎるくらいで、あまりにも無条件的・直接的に女の本源的存在を形成しているがために、男へと志向することにおいて初めて、またはそのような志向として、女の性が成立したり、女の本質を獲得したりすることにはならないのである。このことは、おそらく老婦人の人間像を見ればもっとも解りやすい。男よりもずっと早い年令で、女は能動的な意味でも受動的な意味でも性愛上の魅力の高い限界を越えてしまうのである。しかし、非常にまれな例外的な場合と全くの高齡で老衰したような場合とを除けば、そのために女が男性化されたり、又は性を喪失したりする（この場合はこの方が重要なのだが）ことは決つてないのである。なるほど、男を目指している性的状態そのものは一切消滅しているのだが、彼女の本質の総体には女性の特徴が変らずに保たれたままなのである。おそらく、その時までは男との性愛上の交渉に目的と意義とを持つていよるうに見えたすべてのことが、今やこうした関係のはるか彼方のものとして、別言すれば、自己のうちに中心のある・それ自身で決定的な彼女の本質を持つものとして、姿を現わしてくるのである。それ故に、正しくこの本質を男との関係が終つて子供との関係となったものと解釈しようとすることは、私には充分な解釈とは見えないのだ。この子供との関係が男との関係と同じく、女にとって測るべからざる意味を持っていることは、もちろん

全く論争の余地がない。しかし、これはごく普通に主張されているところからも分るように、ただ社会的利害の立場からなされた定義にすぎないのであり、もう一つ別にある女の立場を女から取り除いて一つの目的關係に転化させたものであり、せいぜいのところ、女に真に個有な統一的本質が、時間系列と女の周辺の多様性の中に設計されたものにすぎないのである。』^(註二)

この箇所の初めのところは、すでに再三述べられたことであるが、女における性は向自的な自己完結的な・本源的存在であることが、変曲されて繰りかえされたものである。その繰り返された理由は、前述の「女は男を離れては無である」とか、「女は男との關係において初めて女性になる」というふうな素朴な仮説（皮相な俗説）の誤りを徹底的に指摘しようとする意図からでもあらうが、女心の本質を男心のそれとの対比において、さらに深く徹底的に探究しようとする哲学者としての序説なのである。

さて、再三繰り返されるこの序説は、彼の女性論の根本前提の一つでもあるので、ジンメルはカントのいわゆる「形而上学的独断」^(註三)のそしりを免れるためにも、それを実証しておく必要があると考えたものであらう。そこでジンメルは、その解り易い実証として「老婦人の人間像」をあげている。そこで述べられている『男よりもずっと早い年齢で、女は……性愛上の魅力の高い限界を越えてしまう』ということについて、簡単に考察してみたい。これが、よく言われる「女は早く老ける」ということの一面を述べているのだと思う。もう一つの面は、女性の青春美は素晴らしく、しかもそれが短期間で終わることは、ショーペンハウエル・キルケゴールなどの学者によっても論ぜられていたのであるが、そのような素晴らしい短期間の青春美との比較において眺めるから、いかにも「早く老ける」ように見えるのであらう。何れにしても、ジンメルの云う性愛上の魅力の早期後退は、年齢的には青春美の早期後退の次の段階を指しているのだと思う。序に言えば「女は早く老ける」は青春美や性的魅力の早期後退を指しているのであって、肉体的・身体的老化現象を指すものではないから、「女は一般に男よりも長生きする」という事実とは矛

盾しないことになるのである。因みに、この女の性的魅力の早期後退あいたという事実が、結婚年齢の間に相当の開きがあった方が好ましいという主張の根拠になっているもののようである。

さて、ジンメルによれば、性愛上の魅力の喪失後に初めて純粹の女の姿が現われてくるのだという。すなわち、それまでは男との性的交渉の面も濃厚であつたがために、「女は男を離れては無である」という前述の素朴な俗説（一種の認識錯乱）が生れることにもなったのであるが、今やそうした紛らわしいものが取り払われて、女性本来の面目が躍如として現われてくるわけである。中年以後の美しい立派な婦人やお婆さんをよく見かけるが、これこそ性的なものから解放された純粹な女性美の典型とでも言えよう。何れにしてもジンメルによれば、女は女性として生れ、男との性的交渉の有無にかかわらず生涯女性として生き続けるということになる。われわれは、ここにボーヴォワール（註四）女史の著名な言葉「人は女に生れない。女になるのだ」の背後にある彼女の女性観とは大分違つていることを見出すであろう。もっとも、ジンメルは形而上学的立場から永遠の真理を語っているのであり、ボーヴォワールは「ここでは永遠の真理をいうつもりでなく、（註五）」と、ことわつてゐるように、現代女性の実存の背景を描いているのだから、ジンメルとは論述の次元が違つとも言えよう。

前項で述べたように、ジンメルによれば性愛上の魅力の喪失後に、すなわち男との性的交渉から離れた時期に、女の真に女性的な本質が姿を現わすことになるわけであるが、この時期に男との関係から子供との関係への転化が行われるとする考方の不充分さ（説明の不徹底さ）をジンメルは指摘している。その根拠を要約すれば、子供との関係は極めて重要なもの（女にとって、引いては人類種族の発展の立場から）であることは異論のないことではあるが、それはあくまで社会的利害の立場から女に課せられたもので、女性の本質とは係わり合ひのないことだといふのである。右の引用文の最後の箇所『時間系列と女の周辺の多様性の中に設計されたもの』という表現はちょっと難解であるが、筆者はつぎのように解した。すなわち『時間系列』の方は、男との関係が終つて今度は独りばちになつたの

では、女の社会的存在理由がなくなるから、人為的に今度は子供との関係という面で女に社会的存在理由を与えたという意味。『女の周辺の多様性』というのは、男には政治・経済というふうな人類社会を運行させる大事業が託されているに反し、女には身辺のこまごました雑多な仕事⁽¹⁾が託されているという意味。育児とか子供の家庭教育とかいうふうな子供関係の仕事も、その雑多な仕事のひとつとして人為的に設計されたもの(Projizierung)にすぎないものである。

『すでに以上の論理的帰結からも分るように、そのような男や子供との関係はすべて、女性の形而上の本質の外見にすぎないのであり、しかもこの外見のうちには女性の形而上の本質は、その閉鎖性(Geschlossenheit)と向自性(Beisichsein)の故に姿を見せてはいないのだ。この本質が、その探究し得る極限の深さに至るまで、徹頭徹尾女性的であることは明らかである。しかし、この女性的たることは上述の意味において現象ではなく、相対的なものでもなく、また何か「他者のため」のものでもない。しかしそうは言っても、誤解を避けるために一言すれば、何かエゴイズムのようなものでは毛頭ないのである。というのは、エゴイズムとは常に他者との交渉であり、自分自身の存在に満足しないことであり、人が先ず自分の存在の中に吸収したがっている、ある外部のものへ目を移すことであるから、それを考えてもすでに分ることである。』^(註六)

この箇所は、前項で述べたことから論理的に当然考えられる事柄を、さらに敷衍して述べたものである。それを要約すれば、男との関係や子供との関係は重要なものであるには相違ないが、女性の形而上の本質と本質的なつながりはないというのである。その根拠はといえば、すでに述べた女心の形而上の本質の閉鎖性と向自性に帰している。ここにも女心は男心とは根本的に違ったものであるというジンメル⁽²⁾の女性観が現われているが、それがつぎの箇所ですらに展開されて行くのである。

『通俗的な見解とは相反することなのではあるが、男の最も深い本質にとっては、自己を手段化すること、すな

する) 以外に道はなく、ここに男の悲劇が成立することについては、本論第十一節で再論される。

この点において男と女は全然違ふと言ひ、前記引用文の通り、それに哲学的表現を与えているのであるが、平易に言えば、つぎのようになるであらう。女は自分の小さな殻からの中に閉じこもりながら、ごく身近な周辺と密接に結合しながら、静かに生きて行く。その周辺は男のそれよりも不安定(註九)(突然末亡人となったりするなどはその一例)であるにもかかわらず、それを意識しないで、今置かれた場をフルにエンジョイすることができ、そこから女性独特の快活(註七)さが生れ、それが心労せる夫に気分転換を与え、夫の慰めになることは、ショーペンハウエルも説いている。実際、人生は将来を案ずれば際限がないのであって、この善い意味での刹那主義は、女の利口で得な性分と言えよう。(註十二)

(註一) 『』に開まれた箇所が原文のままを拙訳した部分である。

(註二) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 75ff.

(註三) カントは、彼以前の形而上学は認識能力に関する批判を欠き、そのために独断的なりとして排斥し、真の形而上学は認識批判をその前段階として、その上に建設されるべきである、と説いたことで有名である。

(註四) “LE DEUXIÈME SEXE”, Simone de Beauvoir, 生島訳『第二の性』第一巻、新潮社、昭和二十八年、七頁。

(註五) 『同書』序、二頁。

(註六) G. Simmel, op. cit., S. 76ff.

(註七) ibid. S. 77.

(註八) 拙稿「ショーペンハウエルの女性論(下)」神戸女学院大学論集 第三卷 第一号 五六頁。

(註九) 女の周辺が男のそれよりも不安定なことは、ショーペンハウエルも認めている。拙稿「前掲論文(中)」神戸女学院大学論集 第四号 四五頁。

(註十) ショーペンハウエルは用語として晴朗・快活(Heiterkeit)を使っているが、晴れやかさ(Serenität, serenity)の方

が、より適切ではあるまいか。音楽の *Serenade* と同根。

(註十一) 拙稿「前掲論文(中)」神戸女学院大学論集 第四号 三三頁。

(註十二) 新約聖書 マタイによる福音書 第六章 三四節参照。

八

本節の最初の部分では後述の女性論に照応する男性論が展開されている。それを平易に要約すればつぎのようになるであろう。それは男性における両極の対立ということである。一つの極は、男は一旦は純粹に感覚なものに向って心を奪われるということである。この点女の性欲は男のそれよりも根深いにもかかわらず、皮膚の表面でのことである度合いが男よりも少ないがために、感覚的である度合いも普通は男よりも少ないと述べている。つぎの極は、男の意志が、精神的なものへ、絶対的な形式へ、超絶的な(transcendent)ものもつ非肉欲性へと彼自身を引っ張るということである。なお、後者の重要な意味は単に前者(感覚的なもの)を否定する点にあるとしているのは、シヨールペンハウエルの根本的な誤りであって、ジンメルによれば、統一化ということはこのように簡単にできることではなく、人は両極性すなわち二つの内面的方向の対立のまま最後まで残らなければならないであろうと、述べている。これはいわゆるジンメルの多原理主義の現われと言えるかも知れない。しかし人間の現実の姿を素直に眺めた態度と云えよう。世界の四聖と言われるような例外的存在はともかくとして、殆んどの人間全部がこの二元的対立のまま、あるいはこの二元性を内包しながら生涯を終わるのではなからうか。人間であるからには昇華が好ましいことに異論はないとしても、精神的なものが感覚的なものを完全に圧殺することが理想であるとするシヨールペンハウエル流の考え方も、一つの思想にすぎないのである。

『これに反して、女は自分自身のうちに留まったきりであり、女の世界はその世界に固有な中心に向って引きつ

けられているのである。女は、本来中心を異にした前述の二つの動き、すなわち感覚的なものを熱望する動きと形式的で超絶的な動き、この二つの動きの彼方に立っているものであるから、女こそ真の「人間」、最も限定された意味の人間的なもののうちに住んでいる者と言い表わすこともできようが、しかるに男の方は「半ば獣、半ば天使」なのである。^(註1)

前項で、男心は肉欲的なもの・感覚的なものに心を奪われる一方、他方では超絶的なものへの憧れ・志向をも同時に持っている述べた。言うなれば、男心は二元的対立のままの世界である。ところが、女はこうした二つの動きの「彼方に立つ」(jenseits stehen) とジンメルは言う。この譬喩的表現をジンメルはたびたび駆使しているが、これは、この二つの動きからの超越的存在、または二つの動きの統一的存在、さらに弁証法的に言えば、二つの動きを内包しながら、それを止揚した存在、ということになるであろう。卑近に言えば、女は肉欲的なもの・醜惡なものなどは内側に適当に丸めこんで、全体をお上品にでっち上げることがお上手だということになる。したがって、肉欲的なもの・醜惡なものは包み隠されてしまうから、いかにも立派に見える。いかにも本当の「人間」らしく見える。

ところが、男は一方において、いかに超絶的なもの・高貴なものをその身に宿していようと、肉欲的なもの・感覚的なものがむき出しのまま、肉眼に映ずる姿で現われるから、「男は獣」だということになる。卑近な一例をあげてを赦されるならば、偉大な道德家・宗教家・芸術家などが道ばたで立小便をする風景は、男の自然の姿であって、矛盾でもなければ、不思議でもないということになる。この獸的側面だけを見て、男の全存在を「けがらわしい獣」と割り切ってしまうことは、とんでもない認識不足と言わなければならない。「半ば獣、半ば天使」「halb Tier, halb Engel」は引用符でくくられているが、ジンメル自身の駆使した用語と思われ、男性の二元的本質をいみじくも譬喩をもって表現した天才の閃めきを伝えている。

『さて客体(対象)に向う場合を考えてみると、一方では、事物の固有な存立と固有な法則性を何か本質的なも

の・何か意味深いものと認めるのが、一般に男性的なやり方なのである。できるだけ客観的で純粹な認識という理想のすべては、この精神的前提の上に立っているわけである。一方これとやらんで、事物の形成と改造への関心が働らくのだが、その際は、事物はその精神（ガイスト
本質・本性・客観精神など）の意であろう——筆者）の課する通りに存在しなければならぬし存続しなければならぬ、という決然たる意志を伴っているのだ。典型としての女性は、事物に対するこのような二重の関係（認識と創造
——筆者）の彼方にいるのである。人間がまさしく何の関係も持っていないもの、それとの関係を意味するにすぎない純粹理論という理想主義は、女性の関心事ではないのである。女が、これは自分とは結びつきのないものだと感ずるものは、外面的に又は倫理的に愛他的な合目的性を持つものであれ、精神的幸福にとって意義深いものであれ、女とは根本的に無縁なものなのである。あたかも、純粹に客観的関心を惹き起すものに對する、言わば無線の結合ともいふべきものが、女には缺けているものようである。（註三）

この箇所之初めのところは、事物（客體）の男性的認識の純粹客観性すなわち即物性について、ジンメル一流の哲學的表現を与えたものである。また事物の形成と改造（創造）に際しても、男はいわば客観主義で事物の客観精神の課する法則に従わねばならぬという決然たる意志を伴っているという。端的に言えば、認識においても、創造においても、男はいわば客観主義を貫ぬいているわけである。（創造に際して男の主観が働らく場合はつぎの箇所ですべて）

ところが、典型としての女は事物に對するこのような二重関係（認識と創造）の彼方にいると、ジンメルは言う。ここでも「彼方にいる」（jenseits stehen）という表現が出て来たが、これについての筆者の解釈については前の箇所ですべた。（八頁）認識といえば客観世界の認識のことであるから、認識の客観性ということは男の場合は言うをまたないことなのだが、女の場合はそうしたことは風馬牛であり、したがって純粹理論などということにも同様に風馬牛ということになるわけである。常識的にも、「女は視野が狭い」とか「女は主観的である」などとよく言わ

れているが、社会学者ウォード (L. F. Ward, 1841—1913) もそれを明瞭に「女は事物を客観的に見る能力を欠いている」^(註四)と表現している。これは主としてジンメルが言うように、女が事物に接した場合、その事物が自分と結び付くかどうか最初にして最後の問題であるところから来るのであろう。この際、その結び付きの關係を感じ分ける鋭敏な感受性を女は持っているように筆者には思われるのであるが、その結び付きがないと感じたものは、根本的に初めから女とは無縁なものだということになる。^(註五)結び付くと感じたもの(例えば女の世界である家庭)については、つぎの箇所で論ぜられている。

『他面、造形 (Gestaltung) という点では、男の作品——靴屋と指物師から画家と詩人にいたるまで——は、客観的形式を主観的力によって完全に規定したものであり、しかも主観の完全なる客観化でもあるのだ。しかし女性が少しも休まずきわめて無私に働いて、非常に豊富な活動と女性の領域内での「創造」によって、また非常に素晴らしい才能によって、それこそ一つの完全な縄張りである家庭というものを彼女の個性の色調で塗りつぶしているも、男のように主観と客観とがたがいに入り込み、しかも同時に独立して存在するという意味での創造力は、彼女のあずかり知らぬものなのである。』^(註六)

以上は所説明瞭で別に論述の要もないと思うのであるが、平易に略述すればつぎのようになるであらう。男においては主観と客観の分化が行われており、創造の場合においても、この両者がそれぞれ独立性を保ちながら、その相關・相剋關係において創造が行使される。女の場合はそうした分化もなく、事物との一元的な直接接觸によって、その事物を自分の個性の色調で塗りつぶすだけである。こうしたものを「創造」と言えるかどうかは問題であるが、かりに一種の創造と解しておくというのが、「創造」(“Schaffen”)を引用符でかこんだ意味であらう。

『認識と創造は、言わばわれわれの存在をそれ自身から外へと向かわせているところの相對關係の動揺であり、中心の移動であり、本質のかの最後の閉鎖性の止揚なのである。ところが女性の典型にとっては、あらゆる外側の

仕事と、あらゆる実際的な任務への献身ともかわらず、この本質の閉鎖性が生の意義を形成しているのである。何等かの方法で事物への関係を持つことは一般的な必然性なわけであるが、この関係を女は、言わば彼女がその中に安らうている存在から離れないで獲得するのである——それは男よりもより直接的な・より本能的な・言わばより素朴な接触・いや合致によって獲得する。女性の存在形態は、認識と創造という特殊な形態において初めて再びその綜合 (Synthese) に出会うところの、主観と客観の特殊な分離には、かかわりのないものなのである。^(註七)

以上の箇所にもジンメル哲学の特色がよく現われていると思う。ジンメルによれば、認識と創造は結局は人間の本質の最後の閉鎖性 (Geschlossenheit) の止揚 (Aufheben) だという。平易に言えば、人間は自己^{おのれ}を空^{おんないろ}にして初めて認識と創造が可能になるという意味である。ところが本論第六節でも男女の性的交渉の場における「女心の閉鎖性」について述べたのであるが、この女心の本質の閉鎖性の故に、女には厳密な男性的な意味においては認識も創造もあり得ないということになるのである。しかし男でも女でも外界の事物への関係を持つことは必然なわけであるが、女においては、その安らうている閉鎖性は扉を開かないままで、男よりもより直接的な・より本能的な・より素朴な接触によってその関係を持つという。男においては主観と客観とが分離 (分化) され、さらにその両者が綜合されることによって、認識と創造が成立することになるのであるが、女性的存在はそうした主観と客観の分離とは無縁の存在だという。何れにしても認識と創造の場にも、ジンメルの得意とする弁証法の駆使されているのが分るであろう。

しからば女性においては認識は不可能なのであろうか。必ずしもそうではないらしい。この女性を論じたジンメルの『哲学的文化』の別章「女性文化」の中には、つぎの表現も見られる、「女性はまさに同じ体質のうちに、男性には与えられていない認識の道具をもっているからである」^(註八) また「異なった存在はまた異なった認識をおこなうとい

う同じ前提から、女性心理は歴史学に独特の業績をもたらすことができるであろう」と。^(註九)このようにして、主観と客観との分離を通じてのいわば弁証法的認識は男の場合のことで、女性の認識の仕方は別だという。認識といえば客観世界の認識であり、それに男女別があるなどという議論は筆者としては初耳であるが、ジンメルの相対主義とか多角的思想家とか言われるものがこの辺りにも現われているのであろう。

なお女性是一般に客観的文化（男性的文化）の創造には不向きであるが、その再生的芸術すなわち演劇・舞踊・演奏音楽・刺繍などが、女性に固有な領域であることについては、前述の「女性文化」の中で述べられている。^(註七)

なお、この機会に、ジンメルがこの箇所でも「女性の典型」と云っていることに注意したい。すなわち、女性論はすべて典型的女性だけを論ずるということである。ところが現象的には非典型的な女性も存在するのである。例えば主観と客観とが分化して働らく男性のような女性（manly woman）も存在する。何故にそうであるかは別個の考察に委ねなければならないが、何れにしても典型的な女性・非典型的な女性の間には価値判断の差別は許されないということである。なぜならば通常、形而上学は存在（実在）に関する究極問題の研究が課題であり、価値判断を排斥するのがその建前であるからである。

(註一) 女の肌が柔軟であることから、女の皮膚の感覚は男のそれよりも鋭敏のように考えられるかも知れないが、事實は逆であるらしい。ある繊維関係の会社の重役の話によれば、女は毛の肌着でもそれほど苦痛ではないらしく、男は肌着について高級なエジプト綿と米綿とを着分けることができる程鋭敏な皮膚の感覚を持っている者もいるという。

(註二) G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 78.

(註三) ibid. S. 78.

(註四) In short, they lack the power to see things objectively, and require that they be presented subjectively.

(L. F. Ward, *Pure Sociology*, 1921, p. 296.)

(註五) 女子大学生の場合純粋理論の学科目もそれが必修科目であるかぎりにおいて、卒業との関連において自分と結びつくことになるわけである。しかし前の(註四)後半によれば、食物学科の学生の場合、有機化学(純粋理論)も食品化学(自分と結びつく学科目)と絶えず関係づけて説明されることを要求することになる。

(註六) G. Simmel, *op. cit.*, S. 78ff.

(註七) *ibid.* S. 79.

(註八) *ibid.* S. 291. 阿閉訳、世界大思想全集『ジンメル・デュルケム』河出書房新社、昭和三四年、一四四頁。

(註九) *ibid.* S. 291ff. 阿閉訳『同書』一四四頁。

(註十) *ibid.* S. 288.

九

『女性を論究した殆んどすべてのものは、男性への——現実的な・空想的な・価値的な——関係において女とは何物であるのか、とそれを述べているだけで、女が女自身として、すなわち向自的存在として何物であるかは問題にしていない。これはもちろん充分に合点のゆくことがらで、というのは、男性的な諸規範と諸要求とが男性的に特殊なものではなく、客観的なもの、無造作に普遍妥当的なものとして通用しているからである。はじめから男は女との相対関係だけを問題にして、女を本質的にまたはただ単に、男との関係だけで存在させているからこそ、最後のには、女はそれ自身としては無である、と決めつけてしまうのである。これでは問題を提起した際にすでに前提とされていたことを証明しているに過ぎないわけである。』^(註)

人類の歴史においては、男性的な諸規範・諸要求などが、そのまま人間一般的なもの・客観的なもの・普遍妥当的

なもの（絶対的な尺度）として通用しているという、ジンメル主張はすでに述べた。（本論第二節）さらに別の相対的な尺度（女に対する男の身勝手な虫のよい註文）をも女に押しつけていることも、すでに述べた。（本論第四節の二）しかもこのような二つの尺度を押しつける無理がそのまま通用しているのは、男性の社会的優位によって支えられていることもすでに述べた。（本論第三節及び第四節の二）そこで女性論もその論者が男性であるかぎりにおいて、このような立場から考察し易くなるのは必然である。したがって、このような立場から捉え得るものだけが捉えられることになり、この立場からは、み出すものは無視される・すなわち無であるとされるわけである。すなわち、向自的（für sich）存在としての女性はいくつか捉えられないことになる。

以上がジンメルの所論である。しかし彼は前述の絶対的尺度も相対的尺度も、男性の社会的優位も何もかも清算して、純粹に女性を向自的存在として考察するのだから、自分の女性論こそ本当の女性論である、とほめかしている。しかも、その絶対的尺度も相対的尺度も本来は女には妥当しないものであり、単に男の社会的優位によって女に押しつけられたものにすぎないのであるから、それによって捉えられたものさえも、ジンメルによれば男の御都合主義に役立つだけのことで、学問的には何の価値もないことになるわけである。ジンメルこそ本当のフェミニストであることを物語っている箇所である。

（註） G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 79ff.

十
（註一）

本節は、次節以下で述べる男の悲劇と女の悲劇の序論ともいうべき部分である。その序論としてジンメルは、男女の本質的差異を簡単に述べているのであるが、以下平易に筆者が適宜要約するにとどめる。

ジンメルによれば、たしかに男性的本質のうちには、自分自身を超えて、非個人的な・超現実的な理念や規範へと昇りつめてゆく心構えのある一つの形式的契機が存在するのである。それが実際には、すべての生産（経済上の生産などの業績・創作などをも含む）（筆者）において自分を超えて表に出て捕えようとする行為となり、また男が一貫して身を捧げている相対するものとの関係を生ずるわけであるが、これらのものは、あらかじめ主観と客観・手段と目的というふうな二元論に分化してゆくことを含んでいるのである。端的に言えば男は二元論的存在である。これに対し女性の本質は超越的統一性（transzendente Einheitlichkeit）にある、とジンメルは言う。この女性の本質の統一性ということは、この女性論に何回となく出てくるのであるが、ちょっと理解しにくい用語である。ところがそれを説明する好個の実例が別章「女性文化」の中にあるので、平易に筆者が適宜要約してみよう。——ある監獄制度に熟練した実務家が、女看守採用の際には、十分教養のある女性だけを採用すべきであると力説した。というのは、男囚はそれが博学的多識な思想犯のような場合でも、身分が囚人である限りにおいて、無教養な下級官吏である看守の命令にも素直に従する。ところが女囚は統一的（統合的）存在であるので、男のような分化ができず、女看守との関係も全人格と全人格とのぶつかり合いとなり、もし女看守が自分より教養が低いと見るや、難題をもちかけて始終トラブルを引き起こすというのである。（註二）

男性の本質の以上のような二元的存在に対し、女性の内在的・超越的統一性を対立させているので、そこから男女両性それぞれの典型的悲劇が現われてくるのである。その悲劇の様相について、男のそれは次節で、女のそれは第十二節で述べられる。

（註一） G. Simmel, Philosophische Kultur, Leipzig, 1911, S. 80.

（註二） Ibid. S. 284ff.

A Study of G. Simmel's View of Womanhood (3)

Résumé

Woman's sex is essentially sufficient in itself and not primarily intended for man.

Man is a dualistic being: sensual and spiritual—in Simmel's words, half beast, half angel. But woman is a being, those two elements in man being integrated.

In the past, the discussion on womanhood only treated of her real, worthy relation to man, but did not ask what she is for herself.

As stated above, man is a dualistic being, but woman is an integrated being. From these two sources, come into existence the typical tragedies of both sexes, the phases of which will be stated in the study to follow.